

人間の危機に対処する協同

大学生協連会長理事 庄司興吉

1 前回理事会以後

大学も入試などが続いてまだ終わっていないところがあると思いますが、大学生協の方も年度末の整理とか新学期準備とかでたいへん忙しい時期が続いていることと思います。前回理事会以降、私が直接関わったこととしては、1月に韓国の大学生協の代表団がかなり大勢見えて交流がありました。また2月には、前回理事会で報告した大学生協の『歴史と未来』という本に、ご貢献いただいた先輩諸氏への感謝の会がありました。さらに3月には、地域センターの会長会議が福井であり、今年度の大きな課題である、共済の分離と全国連帯のあり方の改善をめぐる、議論がおこなわれました。

今日の理事会でも、それに関連した議論が出ます。共済分離は、時代の転換に応じてやむをえずやるのでマイナスの改革なのですが、全国連帯をめぐるかねてからのいろいろマイナス面の克服とうまく掛け合わせて、いわばマイナスとマイナスを乗じてプラスの方向にしていけないか、と私はかねてから言ってきました。その方向でぜひ議論していただきたいと思います。

その後、生協総研で研究奨励賞の報告会・授賞式があり、面白い報告や議論がありましたので、それをめぐって今日はお話したいと思います。ついでながら、私が2007年の教職員会議等で報告したものを二つの論文にまとめており、そのうちの一つは生協総研が出す『現代生協論の探求』に、もう一つは私の大学の研究所紀要に載ります。ぜひ読んでください。今日の話は、生協総研の研究奨励賞の報告のうち、二人の方の報告でとくに考えさせられたことについてです。

一つには、北海道大学の眞崎睦子氏が「日本の大学におけるアルコール飲料の取り扱いと適正飲酒教育：酒販売および提供に関する生協の役割を探る」という報告をしてくれました。生協は前から酒類も扱っており、提供していますので、各大学で毎年、飲酒を強要したりして、急性アルコール中毒で犠牲者が出るような事件が起こっています。そういうことを生協としてどう考えるべきなのか、という話でした。それから、日本大学の江上哲氏は、若者たちのブランド依存症にたいして、携帯に映像を発信してもっと良い方向に向けさせることができないかという研究をしていて、そのために「生協と大学の協同ネット動画制作の意義」について考えているということで、これも面白い話であると思いました。お二人の報告をつうじて依存症について考えさせられました。

2 依存症の拡大：自己喪失人間の増加

最近、依存症を研究する依存学というものができているようです。依存症がもっとも一般的に広がっているのはタバコだと思います。それからお酒、ブランド。江上氏が取り上げた事例によると、中学三年生くらいの女生徒が80歳位のおばあさんの現金80万円くらいをいきなり強奪して、タクシーに乗り、ブランドを買う店に連れて行けといった。

タクシーの運転手は、ブランドなら偽物だけれども安いところがあるよといって、なだめようとしたそうです。笑えない笑い話です。

要するに、そういった子供のレベルにまでブランド依存が広がっているということのようです。そういう意味の依存症もある。それから、パソコンやケータイへの依存も前から問題にされていることです。こういうものに依存しなければ生きていけないような人間が増えてきているようです。その背景として、人間の自己形成、自己維持がますます困難になってきている、という事情があるのでしょう。とくにグローバル情報化時代のなかで、そういう傾向がますます強まってきているようです。

3 他人指向型論からアイデンティティ論をへて自己喪失人間の時代へ

振り返ってみると、第二次世界大戦後まもなくアメリカの有名な社会学者リースマンが『孤独な群衆』という本を書いて、今までアメリカで理想とされてきた内面指向型、つまり固い信念を持って毅然と生きていくというタイプの人間から、大衆消費社会化とともに、周りの他人たちの動向を観察しながら自分の生き方を決めていく人間、つまり他人指向型の人間が増えてきている、それを踏まえた人間のあり方を考えなければならないという問題提起を行ないました。非常に先駆的な、先を読んだ問題提起でした。

その後 E・H・エリクソンという歴史心理学者が、マルティン・ルターとかマハトマ・ガンディーとかを取り上げ、危機と変革の時代におけるアイデンティティ形成の意義、大きな変革の時代に直面した人間が自らのアイデンティティを確立することをつうじて、自分を変えていくと同時に世界を変えていく、そういう人間の問題を提起して、アイデンティティ論が非常にはやりました。これは他人思考型が広がってくるなかで、もっとアイデンティティの問題を考え直さなければいけない、という問題提起につながっていましたが、やがて情報化時代になり電子情報化時代になって、他人指向型化が急速に進むという状況になりました。それとともに、いわゆるヴァーチャル・リアリティのなかに自己を見失う人間が増えてきた。コンピュータ・オタクとか携帯を持ったサルとかいうのは、その延長線上での問題提起でした。

それにたいして、開き直って、メディア時代の人間はカメレオン型でよいのだ、状況によって自分を変えていく人間でよいのだ、という議論も出てきました。しかし、人間は所詮カメレオンではすまないのでしょうか。自分のあり方を考えていかなければいけない。そもそも自己を取り戻すということはどういうことなのか、そもそも自己とは何か、という問題が出てきます。それが協同の意義につながっていくのではないかというのが、今日の話しのポイントです。

4 協同の意義

市民がブルジョアとして現れて世界を変えていくなかで、雇われて働く労働者は最初、選挙権もなかったので労働組合をつくって対抗するしかなかった。しかし彼らは、同時に選挙権獲得運動を進めて、世界の多くの社会で普通選挙制度を実現してきました。労働者がプロレタリアからシティズンになり、一人一票制のもとで社会のあり方を決めていく、

そういう権利をもつ人間になってきたのです。

そういう労働者たちが、事業を自分たちで起こしていくのが協同組合です。ロッヂデールの先駆者協同組合は、イギリスでも選挙制度が確立されていない時期に始まりました。しかし、選挙権の普及とともに、協同組合的な事業のあり方が世界に広まってきた。そういう意味での、シティズンの事業として協同組合を位置づけて、もう一度考え直していかなければいけない、という問題提起を私はしてきました。そのシティズンが今、情報の洪水のなかで自己を見失いそうになっている。そういう問題が起こってきているのです。

自己とはなにか、考え出すと非常に厄介な問題ですが、ヨーロッパの伝統では、それが個人という形で考えられてきた。しかし、厳密に考えれば、個人はありえない。われわれのなかに自分の力で生まれてきた人間は誰もいないので、誰もが社会のなかで育ち、社会のなかで働いて、一人前になっていくのです。個人というなら、それを社会的個人として考えなければならない。そういう人間は、内面指向だけではすまないで、リースマンの提起した他人指向を含めながらバランスを取っていく人間、自己主張をしながら他者との関係性のなかで自己を形成し維持していく人間でなければならない。

そのような社会的個人を可能にするような、心と力を合わせておこなう事業が協同なのではないか。そういう意味からも、単なるシティズンの事業としてだけでなく、大衆消費社会化が進み、さらにグローバル情報化が進む社会での人間のあり方を支えていく協同、そういう方向への協同組合というのを、もう一度考えなくてはならないのではないのでしょうか。

5 依存症からの脱却を支える協同

これに関連して、今までいろいろなことがありました。たとえば、2007年の関西の教職員会議で私と一緒に基調講演をしてくれた人が禁煙について話し、これは生協関係者の多くにとっても耳の痛い話であったと思いますが、禁煙の大切さを強調した。しかし、その彼が最後に、自分が言いたいことはたんに禁煙をしろということではない、自分が禁煙をして良かったと思ったら、それを他人にも勧めていくのが大事なのだと言いました。それこそが人にたいする愛だということで、そういう意味での禁煙の大切さをいつてくれたのです。

今回の生協総研の研究発表会で適正飲酒の話をした眞崎氏は、飲酒ということについてお互いに節度を守りあう、ルールを守りあう、流行の言葉でいうと友愛につながるような話を、生協のなかに取り入れていかなければならないのではないかと、という話をしてくれた。江上氏の話でいうと、ブランドというものが極端に戯画化されてしまっている。ほんらいブランドというのは、良いものをつくって、それは誰それがつくったものだから本当に良いのだ、ということを示すシンボルだったはず。それが、ブランドだけ先走りして、そのマークがついていればいくら高くても買うとか、良いに違いないとか、そのために、中学生の女の子のように強盗までやってしまうという事態が生じているのです。

21世紀の生協のあり方を答申した委員会が、かつて生協ブランドの意義を強調したことがありました。安全・安心のブランド、そういうものを生協が打ち出していき、そのことをつうじて、ブランドの意味を学生諸君にも、あるいは若い人たちだけでなく一般の人

たちにも、理解してもらう。それがブランドの本来の機能です。

日生協も餃子問題でいまだに苦勞していて、研究会で山下会長から聞いたところによると、山下会長が9月に北京で行なわれるICA-APの会議に行こうか行くまいか迷っている。山下会長が中国に行くと、日生協が餃子問題について決着をつけてしまったという印象を中国に与えてしまう。中国もそういう報道をするだろうということがあるので、内部に賛否両論があつていまだに考えている、と話していました。ブランドというのはまさに、大きな組織の運命まで決めていくシンボルなのでしょう。

パソコン・オタク、つまりパソコン依存症という問題も深刻です。本当のコミュニケーションが、パソコンにのめり込みすぎてできなくなってしまう。ケータイになると、ちょっとした計算をする場合にも、人と相談する場合でも、まず携帯を取りだして使わないと何もできない。だから「ケータイを持ったサル」などと揶揄されているわけですが、そんなふうに人間になってきてしまっている。これらにたいしてわれわれとしては考えていかなければならないので、大学生協の場でも、そういうことを積極的に取り上げていかなければならないのではないのでしょうか。

6 大学生協の役割

そういう意味で、大学生協の役割として、生協活動をつうじて、私のいう意味でのシティズン、ブルジョアではなくシティズン、自分の社会のあり方は自分で決めていくという主権を持った人間、を育てていくことがあらためて大切です。大学生協はじっさい、今までそういう人間をたくさん育て、例えば日生協に多くの人材を送り出してきた。しかし他方には、まだ大学生協を自分たちの事業だと思っていない組合員が大勢います。

そういう人たちにたいして、生協の意義を分からせていく活動をしていかなければならない。生協活動をつうじて自己形成・自己維持を助け合う。このあいだの『キャンパスライフ』が、キャリア形成という問題を取り上げて私もそれに書きましたが、生協はキャリア形成を重視してきています。学生のキャリア形成を支援する。キャリアとは自己の歴史です。自己をつくり、自己の歴史を創っていくのがキャリア形成です。それを大学生協としてはサポートしていかなければならない。

そういう背景としても、今日私がお話したような、依存的人間が多くなりすぎている事態にたいして、協同の意味をもう一度提起し強調していく活動が今必要でしょう。そういう意味で、今回は人間の危機に対処する協働という問題提起をさせていただきました。情性におちいらず、つねに生協の意味を考えながら活動してほしいと思います。

(全国理事会、2010年3月20日)